

< 翻 訳 >

叙事詩の宗教哲学
—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (LXVII)¹—

茂木 秀 淳 元信州大学教育学部

キーワード： ナーラーヤナ，アニルツダ，ピンダ，馬頭

[331 章] (B.343 章, C.13315-13370, K.353 章) ナーラーヤナ章 (11) (ナーラダの見た神の姿)

ジャナメージャヤは言った²。

- (1) バラモンよ，大変偉大な物語があなたによって語られました。それを聞いて，聖者たちは皆大いに感嘆しました³。
- (2) 十万詩節の広大なパーラタ族の物語から，この上なき知識の海を思考の攪拌棒によって攪拌して，
- (3) あたかも発酵乳から新鮮なバターが，マラヤ山から白檀が，もろもろのヴェーダから森林書が，もろもろの薬草から⁴ 甘露が引き出されるかのごとくに，
- (4) バラモンよ，この最高の物語の甘露が引き出されました。ナーラーヤナの物語に基づいて，あなたによって語られたものです，苦行の宝庫よ。
- (5) その至尊の神は，支配者であり，あらゆる生き物の本性の創造者であります。ああ，ナーラーヤナの力を見るのが難しい，最高のバラモンよ。
- (6) そこ (ナーラーヤナ) にブラフマー神を始めとするすべての神々は，劫の終りに帰入するのです。聖仙たちもガンダルヴァたちも，動くもの・動かぬものは何でも (帰入するのです)。天にも地にもこれよりすぐれた浄化具はない，と私は思います。
- (7) あらゆる隠棲処の訪問も，あらゆる沐浴場での沐浴も，ナーラーヤナの物語が与えるほどの果報を与えることはありません。
- (8) この世であらゆるものを支配するハリに関する，すべての罪を滅するこの物語を始めから聞いた後に，実に (私たちは) 完全に浄化されるのです。(Cf.MBh.XII.334.4)

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (LXVI)—』(信州大学教育学部研究紀論集第 12 号) に続くものである。略号などは前稿に準ずる。なお本稿で用いる主なものは下記のとおりである。

- Hopkins[1901]: E.W. Hopkins, Yoga-technique in the Great Epic, JAOS, vol.22, 1901, pp.333-379.
- Hopkins[Great Epic]: E.W. Hopkins, The Great Epic of India, Its Character and Origin, 1901, Reprint, Calcutta 1978.
- Esnoul[1979]: A.Esnoul, Nārāyaṇīya Parvan du Mahābhārata, Paris, 1979.
- Matsubara[1994]: Mitsunori Matsubara, Pāncarātra Saṃhitās and Early Vaiṣṇava Theology, Delhi, 1994.

²P. janamejaya uvāca B.,K.: śaunaka uvāca

³B.,K. には，P. の第 1 詩節と第 2 詩節の間に 18 行が挿入されている。その 18 行は P.Appendix に収録されている。このため，この章の P. と B.,K. の詩節番号は大きく異なっている。(Cf.P.vol.16, Appendix I, No.32, p.2105)

⁴P.,B.: oṣadhibhyo K. oṣadhibhyo

- (9) 我が尊敬すべきダナンジャヤ(アルジュナ)が⁵, ヴァースデーヴァに伴われて,(クル・クシェー
トラの戦いで)最高の勝利を得たことに不思議はありません。
- (10) 三界においてさえ, 彼(ダナンジャヤ)にとって達成できないものはなかった, と私は思います。
三界の守護者であるヴィシュヌが, 彼の助けをなす友であったのですから。
- (11) バラモンよ, 私の祖先たちは皆幸福でした。ジャナ・アルダナ(ヴィシュヌ)が, 彼らの幸福と
繁栄のために存在したからです。
- (12) 世間の人々によって礼拝される至尊者は, 苦行によってさえも見ることはできません⁶。しかし
彼らは, シュリーヴァツァ(吉祥の卍字)の印によって飾られた彼をはっきりと見たのです。
- (13) そして, パラメーシュティンの息子ナーラダは彼らよりも幸福でありました⁷。私は不動のナー
ラダを力の劣った聖仙とは思いません。彼は, 白い島に行き, 自身でハリを見たのです。
- (14) 彼(ナーラダ)は, 神の恩寵によって, 神を, その時, アニルツダの姿をとっている神を, はっ
きりと見たのです。
- (15) しかしナーラダは再び, バダリーの隠棲所に⁸ ナラとナーラーヤナに会うために急ぎました。一
体その理由は何なのですか, 聖者よ。
- (16) パラメーシュティンの子ナーラダは, 白い島から戻り, バダリーの隠棲所に着いて, その二人の
聖仙に近づいて,
- (17) どのくらいの期間滞在したのですか。どんな物語を尋ねたのですか⁹。その偉大な者が白い島から
戻った時,
- (18) 偉大な二人の聖仙ナラとナーラーヤナは何を語ったのですか。このことを私に正しくすべてお話
して下さい¹⁰。

⁵ yad āryo me dhanamjayah Ca. āryah, pitāmahaḥ / (āryahとは, 曾祖の, という意味である)

⁶ P. tapasāpi na dṛśyo hi B. tapasātha sudṛśyo hi K. tapasāpy atha durdarśo

⁷ K. はこの三行詩の ab 句の後に次の一行を挿入している。(=MBh.XII.883*)

dṛṣṭavān yo hariṁ devaṁ nārāyaṇam ajaṁ vibhum /

(彼は, 不生にして遍く存在するハリ・ナーラーヤナ神を見ました。)

⁸ badarīm āśramaṁ yat tu Cf. Matsubara[1994]: Nārāyaṇa, regarded as an incarnation of Viṣṇu in the hermitage of Badarī, pp.129.4, 146, Reference No.36.

⁹ P. kāḥ kathāḥ pṛṣṭavāṁś ca saḥ B., K.: praśnān kāṁ pṛṣṭavāṁś ca ha

¹⁰ K. はこの詩節の後に次の 6 行を挿入している。(=MBh.XII.885*)

sautir (885* sūta) uvāca / (サウティは言った。)

tasya tadvacanaṁ śrutvā kṛṣṇadvaipāyanas tadā /

(彼のその言葉を聞いて, その時, クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナは,)

śaśāsa śiṣyam āśinaṁ vaiśampāyanam antike /

(近くに座っている弟子ヴァイシャンプーヤナに指示した。)

tad asmai sarvam ācakṣva yan mattaḥ śrutavān asi /

(「私から聞いたそのすべてを, この者のために語るがよい。」)

guror vacanam ājñāya sa tu vipraśabhas tadā /

(師の言葉に同意して, 雄牛のごとき賢者は,)

ācacakṣe tataḥ sarvam itihāsam purātanam /

(それから, 太古の物語をすべて語った。)

ヴァイシャンプーヤナは言った。

- (19) 無限の威光をもつ至尊のヴィヤーサ仙に敬礼する。彼の恩寵により、私はこのナーラーヤナの物語を語るであろう。
- (20) ナーラダは、白い大きな島に着いて、不動のハリを見た。彼は(そこから)戻るとすぐに、最高のアートマン (parama-ātman) によって言われた重荷(となった言葉)を心で運びながら¹¹、メール山にやって来た。
- (21) 後になって、王よ、遠い道のりを行って無事に再びこの世界に戻って来たということについて、ナーラダ自身に大きな驚きが生じた。
- (22) それからナーラダはメール山からガンダマーダナ山に行った。そして空中からすばやく広々としたバダリーに降りた¹²。
- (23) そして彼は、優れた聖仙である太古の二柱の神が、自らに集中して (ātmaniṣṭau)、大誓約をもって、極めて厳しい苦行を行っているのを見た。
- (24) (彼は) 光はあらゆる世界を照らす太陽よりも大きく、シュリーヴァツアの印をもち、弁髪を輪をもった、礼拝すべき二柱の神を見た。
- (25) (二柱の神は) 水掻きのついた手足¹³、チャクラの印をもつ両足をもち、広い胸、長い腕、そして四つの睾丸をもち¹⁴、
- (26) 六十本の歯、八本の牙、雲の流れのごとき声、美しい口、広い額、美しい顎、美しい眉と鼻をもっていた。
- (27) この二神の頭は、二つの日傘のようである。このような特徴をそなえた二神は「偉大なプルシャ」(mahāpuruṣa) と呼ばれた。

¹¹hrdayenodvahan bhāraṃ yad uktaṃ paramātmanā Cs. bhāraṃ, praśnabhāraṃ / paramātmanā yad uktaṃ gurutarārthayuktatvād bhārabhūtaṃ tad vacanaṃ hrdayenodvahan, cintayan / (bhāraṃ とは、質問という重荷を、という意味である。paramātmanā yad uktaṃ 最高のアートマンによって言われたことは、深い意味と結びついているので、重荷となっている、その言葉を、hrdayenodvan、すなわち、考えつつ、という意味である)

¹²viśālāṃ badarīm anu Cs. viśālāṃ, viśālābhidhām / (viśālāṃ とは、ヴィシャーラーという名の、という意味である)

¹³jālapādabhujau Ca. jālapādabhujau, haṃsapādaḥ, aklinnapāñitalau / jālapādabhujauḥ, tanmāṃsakṛtāhārāḥ / na cābhakṣya-bhakṣaṇe annāntārābhāve doṣa iti ca bhāti / na ca niścitam arthaṃ daivayoḥ kṛte śaknuma iti / (jālapādabhujau とは、ハンサの二本の足であり、硬い二つの手の平である。jālapādabhujauḥ とは、その肉でできた食事をとる者たちは、という意味である。別の食べ物がない場合に、食べられないものを食べることに誤りはない、というように見える。我々は、二柱の神の行為に対し確定的な意味を(考える) 能力はない、ということである)

Cn. jālapādā haṃsāḥ, tadanītabhujau / cakralakṣaṇau, cakrāṅkitapādaḥ / (jālapādāḥ とは、ハンサたちである。(両神は) それによって印づけられた腕をもつ、という意味である。cakralakṣaṇau とは、(両神は) チャクラによって印づけられた足をもつ、という意味である)

Cp. jālapādā haṃsādayaḥ / tatturyabhujāv iva bhujau / haṃsabhujatulyau pāñitalau / (jālapādāḥ とは、ハンサなどである。両腕は、それと同じ腕のようである。両手の手の平は、ハンサの腕に等しい、という意味である) Cs. jālapādo haṃsāḥ, taṃ bhujānau, rekhāmayahaṃsayuktabhujāv iti vā / (jālapādāḥ とはハンサであり、両神は、それ(ハンサ)を食べる、あるいは、真っ直ぐな(?) ハンサのような腕をもつ、という意味である)

¹⁴muṣkacatuṣkiṇau Cv. muṣkacatuṣkiṇau, khaṇḍe caturbījantau / (muṣkacatuṣkiṇau とは、一組として(?) 四つの種子をもつ、という意味である) Ganguli: It is difficult to say what this word (i.e. Mushaks) means. I think with the commentator that it means shoulder joints. (p.172, fn.1) Critical Notes: The epithets muṣkacatuṣkiṇau, ṣaṣṭidantau, and aṣṭadamṣṭrau possibly to indicate that they were 'two-in-one', P. vol.16, p.2229(right), v.25ff.

- (28) この二神を見て、ナーラダは歡喜した。そしてこの二神から返礼を受けた。歡迎(の言葉)をもって語りかけられ、健康を尋ねられたのである。
- (29) 二柱の「最高のプルシャ」(puruṣa-uttama)を観察して、ナーラダの内面に考えが生じた。「あそこに集まり、あらゆる生き物によって尊敬されていた人々、
- (30) すなわち、白い島で私が見た人々に、この二人の最高の聖仙は似ている」と、心で考え、右邊して、クシャ草で作った美しい牀座に座った。
- (31) それから、もろもろの苦行の、もろもろの榮譽の、そしてもろもろの光の住居であり、寂靜と自制をそなえたその二人の聖仙は、朝の儀式を行った。
- (32) その後で、その不動の二神は、足を洗う水と歡待の水によってナーラダに敬意を表し、朝の儀式と賓客歡待の儀式とを行って、牀座に座ったのである、王よ。
- (33) そこに彼らが座ると、その場は輝いた。あたかも澄んだ牛酪の供物による大きな炎のもろもろの祭火によって祭場が輝くかのように。
- (34) そこで、ナーラーヤナは、安樂に座り、疲れることなく、賓客の歡待を受け、くつろいでいるナーラダに言葉をかけた。
- (35) 「さて、そなたは、白い島で、我々両者の最高の根源である¹⁵ 至尊にして永遠なる最高のアートマン(paramātman)を見たか。」

ナーラダは言った。

- (36) 私は、あらゆる姿をもち、動揺しない吉祥なプルシャを見ました。世間の人々はすべて、そして聖仙と共に神々も、その中にいるのです。今日も私は、永遠であるあなた方お二人を見る時、彼の神を見ます。
- (37) 未顯現の姿をもつハリが具えるもろもろの特徴を、あなた方お二人は顯現の姿をして具えていませんから。
- (38) 私は、その神の傍らにあなた方お二人を見ています。私は、最高のアートマンによって送り出され、今日ここにやってきました。(Cf.MBh.12.331.51)
- (39) ダルマの息子であるあなた方お二人の他に誰かハリの威光、名声、吉祥に匹敵する者が三界にいるでしょうか¹⁶。
- (40) ハリはかつて私に知田者という名の存在について語りました¹⁷。そして、将来、いかなる者たちが、どのように(その存在から)現われるか(prādurbhāvāḥ)についても語りました。

¹⁵āvayoḥ prakṛtiḥ parā Cs. prakṛtiḥ, sūkṣmaṃ kāraṇam / (prakṛtiḥとは、微細な原因である) B. はこの詩節の前に、naranārāyaṇāv ūcatus を挿入している。

¹⁶triṣu lokeṣu ṛte Sandhi irregular: *lokeṣu ṛte* Cf. Oberlies[Grammar]: 1.1.3. Absence of *kṣaipra-sandhi*, 1.1.3.7. -u ṛ-, p.16.8.

¹⁷P. kathitaṃ pūrvaṃ nāma kṣetrajñasaṃjñitam B.,K.: kathitaḥ kṛtsno dharmāḥ kṣetrajñasaṃjñitāḥ

- (41) そこ(白い島)では、五つの感官のない¹⁸ 白い¹⁹ 人々が、みな覚醒し、最高のプルシャを信愛しています²⁰。
- (42) 彼らは常に神を讃え、神は彼らと共に喜びます。なぜなら、至尊なる最高のアートマンは、よき人々によって信愛され、再生族を好むからです。
- (43) その神は、讃えられると喜びます。実に彼は常にパーガヴァタ派の人々を好みます。一切を享受し、偏在する神は、信愛ある人を好む友人です²¹。この大きな力と輝きをもつ神は、行為者であり、原因であり、結果であります²²。
- (44) 神が、苦行によって自らに集中すると²³、威光は、白い島(での威光)を超え、自ずから生じる光によって輝くと言われます²⁴。
- (45) 彼は清められた自己をもつ完成者たちにとって²⁵ 三界における寂静であります²⁶。この清浄な認識(buddhi)によって、神は至高の誓約を行うのです。
- (46) 神々の支配者が為しがたい苦行を行うところでは、太陽は熱さず、月は輝かず、風は吹かないのです。
- (47) 一切の享受者である神は、地上に八掌の高さの祭壇を²⁷ 設置して、一本足で立ち、腕を上にあげ、顔を北方に向け、もろもろのヴェーダを支分と共に読誦しつつ、極めて為しがたい苦行を行いました。
- (48) ブラフマー神、聖仙たち、獣主自身、他のすぐれた神々、ダイティヤ・ダーナヴァ・ラクシャサたち、

¹⁸pañcendriyavivarjitāḥ Cs. pañcendriyavivarjitāḥ, sadā yogarūḍhatvāt abahirmiṣkrāntendriyāḥ, niranantaram paramātmānusamdhāne sthitāḥ / (pañcendriyavivarjitāḥとは、常にヨーガに従事しているの、外に出て行く感官をもたない者たち、すなわち、不断に最高のアートマンの探求に従事している者たちは、という意味である) Cv. pañcendriyavivarjitāḥ, prākṛtapañcendriyarahitāḥ / (pañcendriyavivarjitāḥとは、通常の人々の五感をもたない、という意味である)

¹⁹śvetāḥ Cs. śuddhāḥ / ((śvetāḥとは) 清浄な、という意味である)

²⁰ye puruṣāḥ.... / te sarve bhaktāś ca puruṣottamam Cf.Matsubara[1994]: profound relationship between *puruṣa* and *puruṣottama*, p.79.11.

²¹P. bāndhavo B.,K.: mādhave

²²B.,K. はこの後に次の1行を挿入している。(=MBh.XII.887*)

hetuś cājñā vidhānam (K.,887*: cājñāvidhānam) ca tattvaṃ caiva mahāyaśāḥ /

(大きな栄光をもつ神は、原因であり、命令であり、規範であり、真理であります。)

²³tapasā yojya so "tmānam Cf.Oberlies[Grammar]: *yojya*, absolute suffix *-ya*, (a) added to simple verbs, p.284.9. Sandhi irregular: *so "tmānam* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.2. Special cases of *sandhi*, 1.2.4. *-o* ' < /-as ā/, a) where the following word is *ātman*, p.25.4.

²⁴ity abhivikhyātām Deussen は、Brh.Up.4.3.6 の参照を指示している。(p.823, v.57)

²⁵P. siddhānam bhāvitātmanām B.,K.: vihitā bhāvitātmanā

²⁶śantiḥ sā Ca. śantiḥ, muktiḥ / (śantiḥとは、解脱という意味である)

²⁷P. vedīm aṣṭatalotsedhām B.,K.: vedīm aṣṭanalotsedhām Ca. atra talaśabdena tāla uktaḥ, ṭṭarāja ity eke / madhyamāṅguṣṭhasya vitatamātram iti tu tattvam / tena caturhastocchritām ity arthaḥ / (ここでは tala (掌) の語によって tāla (棕櫚) が意図されている。それは草の王であると、ある人々は言う。しかし実際は、中指から親指を広げた (?) 長さにすぎない。従って四腕尺分上げられている(高さの祭壇を)、という意味である) Cap.: taleti pāṭhe 'pi hastasya talam aṅgulocchrāyam eva bhavati / (tala (掌) という読みでも、腕尺にとっての掌とは、指幅の高さである)

Cs. aṣṭatālaparimitocchrāyām, prakṛtimahadahamkārāpācātanmātrām / (aṣṭatālaparimitocchrāyām 八棕櫚によって限定された高さ(をもつ祭壇)を、とは、根本原質・大・自我意識・五唯を本性とする(祭壇を)、という意味である)

- (49) 蛇たち、鳥たち、ガンダルヴァたち、シッダたち、王仙たち、彼らすべては、この神の両足にかしずいて、常に規定に従い、神々への供物と祖霊への供物を供えました。
- (50) 帰依の心をもつ人々によって²⁸行われた祭式すべてを、神は恭しく自ら受納しました。
- (51) この神にとって、三界には偉大な目覚めた者たちより他に好ましい者はいません²⁹。それゆえ、私は絶対的に帰依する者となったのです³⁰。そしてその最高のアートマンに送り出されて、ここにやって来ました。(Cf.MBh.12.331.38)
- (52) このように至尊の神ハリは自ら私に語ったのです。私は、あなた方お二人と共に、永遠に³¹彼に専心していくでしょう。

[332章] (B.344章, C.13371-13398, K.354章) (ナーラーヤナ章 (12) 神を見ること)

ナラとナーラーヤナは言った。

- (1) あなたが自身で最高神 (prabhu 主) を見たということは、あなたは幸福であり、恩恵を得たということである。なぜなら、蓮華より生じた者も含めて、自身で最高神を見た者はいないからである。
- (2) 未顕現を母胎とする至尊の最高のプルシャは、見るのが難しいのである。ナーラダよ、そなたにこのように真実の語が語られているのである。
- (3) この神には信愛をもつ者たちよりも好ましい者は³²世界にいない。そのため、自ら自身の身体を (ātmanam) 示したのである、最高の再生族よ。
- (4) なぜなら、この最高のアートマンが苦行を行った場所には、我々二人を除いて、誰も到達できないからである、最高の再生族よ。
- (5) なぜなら、千の太陽をあわせたような輝きが、神自ら輝くことによって、神の場所の輝きとなるであろうから。
- (6) 賢者よ、一切の支配者であるこの神より、忍耐 (kṣamā) が生じた。そして、大地がそれと結びついたのである、忍耐ある者たちの中で最もすぐれた者よ。
- (7) そして、その神から、あらゆる生き物にとって好ましい味が³³生じた。そして、水たちがそれと結びつき、流動性を得たのである。

²⁸ekāntagatabuddhibhiḥ Cn. ekāntagatabuddhibhiḥ, avyabharitabuddhibhiḥ / (ekāntagatabuddhibhiḥとは、動揺のない認識をもつ人々によって、という意味である)

²⁹na tasyāyaḥ priyatarāḥ pratibuddhair mahātmabhiḥ / Cf.Oberlies[Grammar]: 10.3.3. Syntax of cases: The instrumental, *instrumentalis comparationis*, construed with (b) a comparative or a comparative-like word, p.324.2. Cf.Critical Notes: Irregular use of instru. for abl., P. vol.16, p.2229(right), v.51.

³⁰P. tato 'smy aikāntikaṃ gataḥ B.,K.: tato 'syaikāntikaṃ gataḥ Cs. aikāntikaṃ, sarvātmabhāvam / (aikāntikaṃとは、普遍我の状態に、という意味である)

³¹nityaśaḥ Cs. nityaśaḥ ity anena dakṣaśāpasyānavasaraḥ prārthitaḥ / (nityaśaḥというこの語によって、ダクシャの呪いは機会を得ないということが意図されている)

³²P. bhkātaiḥ priyataro B.,K.: bhaktāt priyataro Cf.Oberlies[Grammar]: 10.3.3.Syntax of cases: The instrumental, *instrumentalis comparationis*, construed with (b) a comparative or a comparative-like word, p.324.3.

³³P. devāt sarvabhūtahito rasah B.,K.: devāt sarvabhūtahitād rasah

- (8) さらにその神から、色という性質を本性とする火が生じた。太陽がそれと結びついて、もろもろの世界で輝くのである。
- (9) それから、最高のプルシャである神から触感が生じた。風がそれと結びつき、もろもろの世界を吹きわたるのである。
- (10) そして、力ある全世界の支配者から音声が生じた。虚空がそれと結びついたために、(虚空は)覆われずに存在するのである。
- (11) そして、その神からあらゆる生き物にある心 (manas) が生じた。月がそれと結びつき、照明の性質をもっているのである。
- (12) 学問を伴侶とし³⁴、神への供物と祖霊への供物を享受する至尊者がいるその場所は³⁵、ヴェーダにおいて「六元素を生じさせるもの」³⁶と呼ばれている。
- (13) この世で汚れなく、善悪を離れて、平安の道を行く人々にとって、最高のバラモンよ、あらゆる世界の暗闇を除く太陽は、「門」(dvāra)と言われるのである³⁷。
- (14) 太陽によって身体すべてを焼かれて³⁸、誰にもどこにも見えない極微となり、そうなった後に、その神に入るのである。
- (15) 極微となった者たちは、その神からも解放されると、アニルツダの身体に留まり³⁹、さらにそこから心となって (manobhūtās)、ブラドユムナに入るのである⁴⁰。
- (16) そして、最もすぐれた賢者たち、すなわちサーンキヤに従う人々は、バーガヴァタ派の人々と共に、ブラドユムナからも解放されて、命我 (jīva) すなわちサンカルシャナに入るのである。
- (17) それから、彼らは、三種のグナからなる状態を離れ、すぐに最高のアートマン、すなわちグナなき状態 (nirguṇa) を本性とする知田者に入るのである、すぐれたバラモンよ。知田者とは、一切を住処とするヴァースデーヴァであると⁴¹正しく認識せよ。

³⁴vidyāsahāyo Cs. vidyāsahāyaḥ, prakṛtisahāyaḥ, prakṛtir api viparītalakṣaṇayā vidyety ucyate / (vidyāsahāyaḥとは、プラクリティを伴侶とし、という意味である。プラクリティも、(神と?) 反対の特徴のために、vidyāと言われるのである)

³⁵yatrāste bhagavān havyakavyabhuk Cs. bhagavān, aniruddhaḥ / (bhagavānとは、アニルツダは、という意味である)

³⁶P. ṣaḍbhūtopādakaṃ nāma B.,K.: sadbhūtopādakaṃ nāma Ca. ṣaḍbhūtāni, manasā saha / (ṣaḍbhūtāni 六元素とは、マナスを入れてである)

³⁷K. はこの詩節の後に次の1行を挿入している。(=MBh.XII.889*)

jvālāmālī mahātejā yenedaṃ dhāryate jagat /

(炎の輪である大火、それによって世界は保持されている。)

³⁸ādityadagdhasarvāṅgāḥ Ca. ādityadagdhasarvāṅgāḥ, ādityatejasā kṣapitasakaladehārambhakabhūtacayāḥ, pāvakaśodhitakanakavad amalāḥ / ata eva paramāṇubhūtāḥ / (ādityadagdhasarvāṅgāḥとは、太陽の熱によって、全身を構成している元素の集積を破壊され、火によって純化された金属のごとく、汚れのなくなった者たちは、それゆえに、paramāṇubhūtāḥ 極微となった者たちは、という意味である)

³⁹aniruddhatanau sthitāḥ Ca.,Cp.: aniruddhatanau, ahaṃkāre / (Cp. ahaṃkāropādhanau /) (aniruddhatanauとは、自我意識に、(Cp. 自我意識と呼ばれるものに) という意味である)

⁴⁰pradyumnaṃ praviśanti Ca. praviśanti, aham eveti vyavasyanti / (praviśantiとは、「私こそが(ブラドユムナである)」と決断する、という意味である)

⁴¹sarvāvāsaṃ vāsudevaṃ kṣetraññaṃ Ganguli: Vasudeva is the abode or original refuge of all things, p.175.35.

Cf.Matsubara[1994]: Vāsudeva, immanent God, p.94.28; accessibility of Vāsudeva, p.97.16.

- (18) 集中した心 (manas) をもち、自制し、感官を制御して、帰依の心の生じた者たちは、ヴァースデーヴァに入るのである⁴²。
- (19) 我々二人もまた、ダルマの家に生まれ、優れた再生族よ、好ましい広々とした (隠棲処) に住んで⁴³、恐ろしい苦行を行なった。
- (20) この神の、神々によって好まれる多くの出現が三界において生じるであろう。それらに幸いあれ、というこのために⁴⁴(苦行を行なったのである)、パラモンよ。
- (21) 我々二人は、以前の通り自らの規定に専念し、あらゆる苦行と最高の誓約を正しく実行した⁴⁵。
- (22) 我々二人は、苦行に富む者よ、白い島でそなたを見た。そなたは至尊者によって近づかれ、話をした⁴⁶。
- (23) 我々二人は、動くもの・動かぬものを含む三界の出来事に関して、すべて知っている⁴⁷。善悪はどのように将来生じるか、過去に生じたか、あるいは現在生じるかについて (知っている)⁴⁸。

ヴァイシャンプーヤナは言った。

- (24) ナーラダは、このように両者のことばを聞いて合掌し、ナーラーヤナに専心し、恐ろしい苦行を始めました。
- (25) ナーラダは、ナーラーヤナに向けられた数多くのマントラを、規定通りに低誦しました。天の千年の間、ナラとナーラーヤナの隠棲所で、
- (26) 大活力の至尊の聖仙ナーラダは、その神を、そしてナラとナーラーヤナの両者をも、礼拝しつつ過ごしました。

[333 章] (B.345 章, C.13399-13426, K.355 章) (ナーラーヤナ章 (13) ピトリ-ピンダのいわれ)

ヴァイシャンプーヤナは言った。

- (1) パラメーシュティンの息子ナーラダは、ある時、正しく神々に供物を供え⁴⁹、その後で祖先に供物を供えました。

⁴²vāsudevaṃ viśanti te (Cf.Matsubara[1994]: accessibility of Vāsudeva, p.97.16.

⁴³viśālām āśritya N. viśālām badarīm / (viśālām, すなわち、バダリーに、という意味である)

⁴⁴P. svastīty ato B.,K.: svastīty atho Cs. svastītisābdo hetuvacanah, svastyartham ity arthaḥ / (svastīti という語は、理由を述べたものである。幸いのために、という意味である)

⁴⁵K. はこの詩節の後に次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.890*)

svārthena vidhinā yuktaḥ sarvakṛcchavrate sthitaḥ /

((そなたは?) 自分のための規定に従って集中し、あらゆる苦行と誓約を実行した。)

⁴⁶P. saṃjalpaṃ kṛtavān yathā B.,K.: saṃkalpaṃ kṛtavān tathā

⁴⁷P.,K.: nau saṃviditaṃ B. nau svaṃ viditaṃ

⁴⁸B.,K. は、この詩節の後に次の一行を挿入している。(MBh.XII.891*)

sarvaṃ sa te kathitavān devadevo mahāmune /

(かの神々の神が、すべてをそなたに語ったのである、偉大な聖者よ。)

⁴⁹daivaṃ kṛtvā Ca. daivaṃ, devatarpaṇādi / (daivam とは、神を満足させるものなどを、という意味である)

- (2) そして、すぐれたダルマの息子である力強き神は⁵⁰ 次の言葉を語った。「神々への供物と祖先への供物が準備される時、誰が祭られているのか、すぐれた再生族よ。
- (3) そなたは、伝承に従って、それを余に語るがよい、思慮ある者の中ですぐれた者よ。いかなる祭式が行われるのか。そしてその果報として何が望まれるのか。」

ナーラダは言った。

- (4) かつて御身は、神々への供養が為されるべきであり、神々への供養は、最高の祭式であり⁵¹、永遠の最高のアートマンである、とお話しされました。
- (5) それに鼓舞されて⁵²、私はそれ以来常に不滅のヴァイクンタを崇拝しています。その神から太古に世界の祖父であるブラフマー神が生まれました。
- (6) パラメーシュティン(ブラフマー神)も喜んで、私の父(ダクシャ)を生みました⁵³。私は、最初に(ブラフマー神によって)願われ、彼(ブラフマー神)の願望より生じた息子であります⁵⁴。
- (7) 私は、善き方よ、ナーラーヤナの教えによって⁵⁵、祖霊たちを祭っています。このようにかの至尊者は、父であり、母であり、祖父であります。もろもろの祖霊の祭式において私は常に世界の主を祭っているのです。
- (8) また他の伝承では、神よ⁵⁶、息子たちを父たちが祭りました。ヴェーダの伝承が減ると、再び息子たちによって教えられました。そのために、彼らマントラを授ける息子たちは、父たることを得たのです。
- (9) 清められた自己をもつあなたがた二人は、かつて、(次のことを)知らされました⁵⁷。「息子たちと父たちは互いに敬ったのである。
- (10) まず地面にクシャ草たちを敷いて、その地面にピンダ(pinda 団子)を三つ置いて」と。しかし、なぜかつて父たちはピンダという名前を得たのですか。

ナラとナーラーヤナは言った。

⁵⁰jyeṣṭho dharmātmajaḥ prabhuḥ Cp. jyeṣṭho dharmātmajaḥ nārāyaṇa eva / (jyeṣṭho dharmātmajaḥ とは、ナーラーヤナ自身は、という意味である)

⁵¹P.,B.: paro yajñāḥ K. paro jñeyāḥ

⁵²tadbhāvito Cp. bhāvitaḥ, preṃṇā vaśīkṛtaḥ / (bhāvitaḥ とは、愛に支配されて、という意味である)

⁵³mama vai pitaraṃ prītaḥ parameṣṭhy apy ajījanat / Cp. sa ca brahmā mamaiva pitaraṃ parameṣṭhināmānam, ajījanat iti vadan janmāntare nārādo dakṣaśāpāt parameṣṭhino jāta ity ākhyānam harivaṃśe sthitam (adhy. 17f.) buddhisthaṃ karoti / (「そのブラフマー神は、mamaiva pitaram 私の父を、すなわち、パラメーシュティンという名の者を、ajījanat 生んだ」と語りつつ、「別の誕生において、ナーラダは、ダクシャの呪いによって、パラメーシュティン(ブラフマー神)から生まれた」という『ハリバンシャ』にある物語を意識しているのである)(Critical Notes, P. vol.16, p.2230(left), v.6)

⁵⁴ahaṃ saṃkalpajas tasya putraḥ prathamakalpitaḥ Cv. tasya nārāyaṇasya / (tasya とは、ナーラーヤナの、という意味である)

⁵⁵nārāyaṇavidhau kṛte Cn. nārāyaṇavidhau, tāntrike pūjādu / (nārāyaṇavidhau とは、タントラに属する祭礼などにおいて、という意味である) Cp. nārāyaṇavidhau, nārāyaṇajñānamittam / nārāyaṇa iti saṃbodhanaṃ vā / (nārāyaṇavidhau とは、ナーラーヤナの知識に基づいて、という意味である。あるいは「ナーラーヤナよ」という呼称である) Cs. nārāyaṇavidhau kṛte, nārāyaṇārādhane vihite kṛte sati / (nārāyaṇavidhau kṛte とは、ナーラーヤナの礼拝において命じられたものが、kṛte, すなわち、あるので、という意味である)

⁵⁶P. deva B. devī K. devāḥ

⁵⁷P. puraitad viditaṃ B.,K.: surais tad viditaṃ

- (11) この大地はかつては(海底に)沈んで、海に取り囲まれていた。ゴーヴィンダは、猪の姿をとって⁵⁸、これをすばやく持ち上げた。
- (12) 水と泥で手足を汚して、世界の必要 (kārya) のために活動した最高のプルシャは、大地を本来の場所に安定させてから、
- (13) 昼の儀式の時間になり、太陽が中天に来た時⁵⁹、その力強い神は、クシャ草の束を地面に敷き広げ、牙に付着した泥の塊たちを⁶⁰素早く振り払って、(その上に)置いたのである、ナーラダよ。
- (14) 力ある彼は、それらの中に自分自身を示して (teṣv ātmānam uddīśya)、規定どおりに祖霊祭を行った⁶¹。自らの流儀によって、三つのピンダ(泥団子)を準備して、
- (15) 神々の支配者は、自分の身体の熱より生じた油性に富む胡麻によって供物 (apavarga) を清めて、顔を東に向けて自ら(祖霊祭を)行ったのである。
- (16) それから、道徳 (maryādā) を確立するために、次のように言った⁶²。「世界創造者である余は、自ら父祖たちを創造するための準備をした。
- (17) 余が父祖のためになすべきことの最高の規定を考えていた時、これらのピンダは⁶³、余の二本の牙から南の方角に振り落された。ピンダが大地に到達すると、それから父祖たちが(生じたのである)⁶⁴。
- (18) 決まった姿はもたないが、ピンダの姿をしたこれら三者が⁶⁵、この世で余が創造した永遠の父祖たちであるべし。
- (19) まさしく余は、父、祖父、そして曾祖父として、三つのピンダの中に存在していると認識すべきである。
- (20) 余より優れた者はいない。余自身誰を崇拜すべきであろうか。あるいは、この世界で誰が余の父であろうか。余こそが⁶⁶祖父である。
- (21) 余こそが祖父の父であり、そして⁶⁷この世界での (atra) 原因である」と、この言葉を神々の神ヴリシャーカピは語って、

⁵⁸P. vārāhaṃ rūpam āśritaḥ B.,K.: vārāhaṃ rūpam āsthitaḥ

⁵⁹P. madhyamaṃdinagate ravau B.,K.: madhyamadeśagate ravau

⁶⁰P. daṃṣṭrāvīlagṇān mṛtṭpīṇḍān B.,K.: daṃṣṭrāvīlagṇāṃs trīn piṇḍān

⁶¹pitryaṃ cakre yathāvidhi Ca. mṛtṭpīṇḍaṃ daṃṣṭrāgrālagṇaṃ pravṛṭtyātmānam eva pitṛṭvena prakalpya lokavyavahārahetoḥ / (泥の団子は、牙の先に付着すると、活動を本性とするので (?), 世間の慣用に基づいて、父祖であると考えて、(祖霊祭を行った) という意味である)

⁶²B.,K. はこの後に、vṛṣākāpīr uvāca を挿入している。

⁶³P.,B.: piṇḍās K. pīḍya Cn. viṣṇoḥ śālagrāma iva piṇḍānām mūrtayaḥ piṇḍā iva / (ヴィシュヌの聖石シャーラグラマのように、父祖たちのもろもろの姿は、ピンダのごとくである、という意味である)

⁶⁴tasmāt pitara eva te Cv. tasmāt, dakṣiṇadiśi patitavāt / (tasmāt とは、南方の地に落ちたために、という意味である)

⁶⁵trayo mūrtivihīnā vai piṇḍamūrtidharās tv ime Cv. mānuṣaiḥ pūjyamānāḥ pitarāḥ mānuṣadṛggocaramūrtirahitavād amūrtāḥ / devaiḥ pūjyamānās tu samūrtā ity ucyante / (人間たちによって礼拝される時、祖先たち人間の眼を領域とする形態を欠いているので、形態をもたない。しかし神々によって礼拝される時は、形態をもつ、ということが言われているのである)

⁶⁶ko vā mama pitā loke aham eva pitāmahaḥ Sandhi irregular: *loke aham* Cf. Oberlies[Grammar]: 1.1.5. Absence of *abhinihita-sandhi*, 1.1.5.1. -e a-, p.2.11.

⁶⁷caiva aham Sandhi irregular: *caiva aham* Cf. Oberlies[Grammar]: 1.1.1. Absence of *savarṇa-sandhi*, 1.1.1.1. -a/ā a/ā-, p.2.11.

- (22) ヴァラーハ山において⁶⁸ 詳細な儀式と共にピンダを捧げ、自らを礼拝し、そこで姿を消したのである、賢者よ。
- (23) このために、清浄な考えをもつ者よ⁶⁹、父祖たちはピンダと呼ばれ、グリシャーカピの言葉に従って、常に崇拝されるのである。
- (24) 父祖たちを、神々を、師匠たちを、そして賓客たちを、牛たちを、再生族の主要な人々を、大地を、そして母を⁷⁰、行為によって、心によって、言葉によって、崇拝する人々は、まさにヴィシュヌを崇拝しているのである。
- (25) 内在し、あらゆる生き物 (sattva) の身体に入り、あらゆる生き物たちに対して等しく、楽と苦を支配する (īśvara) かの至尊者は、大きな存在であり (mahān)、大きなアートマンであり、一切のアートマンであるナーラーヤナとして天啓聖典に伝えられている。

[334 章] (B.346 章, C.13427-13448, K.356 章) (ナーラーヤナ章 (14) ナーラーヤナの称賛)

ヴァイシャンプーヤナは言った。

- (1) ナーラダは、ナラとナーラーヤナによって言われたこの言葉を聞いて、この神に対して絶対的な信愛をもち、専一に礼拝する者となった⁷¹。
- (2) (ナーラダは) 千年の間ナラとナーラーヤナの隠棲処に住み、至尊者の物語を聞き、そして不滅のハリを見た後、それから速やかに自分の隠棲処があるヒマラヤ山に行った。
- (3) 高名な苦行者である二人の聖仙、ナラとナーラーヤナも、その心地よい隠棲処で最高の苦行を行った。
- (4) パンダヴァ家の子孫であり、量り知れない勇気をもつそなたもまた、この物語を始めから聞いて、今や本性清らかな者となった。(Cf.MBh.XII.331.8)
- (5) 不滅のヴィシュヌ神を、行為によって、心によって、言葉によって、嫌うような者には、来世も⁷² この世もないのである、最高の王よ。
- (6) すぐれた神であるナーラーヤナ、すなわちハリを、嫌うような者の父祖たちは、永遠に (śāśvatīḥ samāḥ) 地獄に沈むのである。
- (7) どうして誰か世の人にとってアートマンが嫌うべきものとなるのか⁷³。虎のごとき人よ、アートマンはヴィシュヌであると知るべきである。このことは定まっている。

⁶⁸ varāhaparvate Cf.Mehendale[1997]: Varāha², m. Name of a mountain, p.438(left).12.

⁶⁹P.,K.: etadarthaṃ śubhamate B. eṣā tasya sthītir vipra

⁷⁰P.,K.: pṛthivīm mātaraṃ tathā K. pitaraṃmātaraṃ tathā

⁷¹deve ekāntitvam upeyivān Sandhi irregular: *deve ekāntitvam* Cf.Oberlies[Grammar]: 1.1.4. Absence of *udgrāha-sandhi*, 1.1.4.5 -e e-, p.18.16.

⁷²P. tasya paro loko B.,K.: tasyāparo loko

⁷³kathaṃ nāma bhaved dveṣya ātmā lokasya kasyacit Ganguli: How, then, can Vishnu be hated, for in hating him one would hate one's own self, p.179.13. Deussen: Wie könnte aber irgend jemandem der Ātman (das Selbst) der Welt hassenswert erscheinen!, p.830, v.7. Esnoul: Comment, en vérité, quelqu'un peut-il être hostile au Soi des mondes?, p.183, v.7.

- (8) このガンダーヴァティーの息子であり、我々の師である聖仙(ヴィヤーサ)によって、この最高のアートマンの⁷⁴偉大さは語られた。私は彼から聞いたことを、そなたに語ったのである、罪なき者よ⁷⁵。
- (9) クリシュナ・ドヴァイパーヤナ、すなわち、ヴィヤーサを力あるナーラーヤナと知れ。なぜならば、他の誰が、虎のごとき人よ⁷⁶、『マハーバーラタ』の作者となれるであろうか。かの力強き神以外に、一体誰が種々のダルマを語る事ができるであろうか。
- (10) そなたが準備した通りに、大祭は実行されるべし (vartatām)。そなたはアシュヴァメーダ祭を準備し、正しくダルマを聞いたのであるから⁷⁷。
- (11) パーリクシタ王(ジャナメージャヤ)はこの偉大な物語を聞いて、それから祭式完遂のために、あらゆる行為を始めた。
- (12) 私は、ナーラーヤナの物語をこのようにそなたに語った⁷⁸ この物語は、かつて、クリシュナとビーシュマが聞いている時、ナーラダが、私の、そして聖仙たちやパンドヴァたちの師(ヴィヤーサ)に対して⁷⁹語ったものである、王よ。(Cf.MBh.XII.336.11, 60)
- (13) 彼(ナーラーヤナ)は、最高の師であり、世界の主であり、大地の保持者であり、寂静と抑制の器である。聖典と戒律の器であり、再生族の最高の幸福であり、ハリであり、不死の幸福である。(ナーラーヤナが)そなたの避難所(gati)であれ⁸⁰。(韻律: Mātrāsamaka 不規則⁸¹)

⁷⁴P.,K.: paramātmanah B. param avyayam

⁷⁵B.,K. はこの後に次の4行を挿入している。

nāradena tu samprāptaḥ sarahasyaḥ sasamgrahaḥ /

(ナーラダによって、秘儀と綱要と共に、)

eṣa dharmo jagannāthāt sāksān nārāyaṇān nṛpa /

(このダルマは直接に世界の守護者であるナーラーヤナから得られたのである、王よ。)

evam eṣa mahān dharmah sa te pūrvaṃ nṛpottama /

(このようにこの偉大な教義は、最も優れた王よ、)

kathito hariḡtāsu samāsavidhikalpitaḥ /

(かつて『ハリ・ギター』において、簡潔な方法で編集され、そなたに語られた。)

Cf.MBh.XII.336.49; Hopkins[Great Epic]: Hariḡtās, p.53.2.

⁷⁶P.,B.: ko hy 'nyaḥ puruṣavyāghra K. ko hy 'nyaḥ puṇḍarikākṣān

⁷⁷P.,B.: śrutadharmā ca tattvataḥ K. śrutadharmā ca tattvataḥ Cf.Critical Notes: śrutadharmā, irregular for śrutadharmā, P. vol.16, p.2230(left), v.10.

B.,K. はこの詩節の後に、sautir uvāca を挿入している。

⁷⁸この P.12ab の後に B.,K. は次の1行を挿入している。(=MBh.XII.892*)

pr̥ṣṭena śaunakādyeḥa namimiṣāraṇyavāsiṣu /

((そなたに)尋ねられて、シャウナカよ、今ここでナイミシャの森に住む者たちの中で(そなたに語った)。)

⁷⁹P. purā rājan gurave me B.,K.: purā yad vai gurave tu N. gurave bṛhaspataye / (gurave とは、プリハスパティに、という意味である) Ganguli: It is not clear who is the Guru referred to in this verse. ... It is probable that either Vyāsa or Vaisampayana is meant, p.179, fn.2.

⁸⁰この詩節は、P. と B.,K. で大きく読みが異なっている。韻律の問題もあるので、以下にそれぞれの読みを掲げておくことにする。

sa hi paramagurur bhuvanapatir dhaṇidharaḥ śamanīyamanidhiḥ / (P.ab)

śrutivīyananidhir dvijaparamahitas tava bhavatu gatir harir amarahitaḥ / (P.cd)

sa hi paramarṣir janabhuvanapatir pṛthudharaṇidharaḥ śrutivīyanaparaḥ / (B.,K.:ab)

śamanīyamanidhir yamanīyamaparo dvijavarasahitas tava ca bhavatu gatir harir amarahitaḥ / (B.,K.:cd)

⁸¹P. a,b 句: 14mātrā; c,d 句: 16 mātrā B.,K.: a, b, c 句: 16 mātrā; d 句: 17 mātrā (+8 mātrā) B.,K. は、c 句に yamanīyamaparo (8 mātrā) を挿入しているので、d 句の harir amarahitaḥ が過剰な 8 mātrā となっている。 Cf.Hopkins[Great Epic]: mātrāsamaka, p.353.7.

- (14) 彼(ナーラーヤナ)は、もろもろの大苦行の器であり、大きな名誉の器であり、アリシュタカの殺害者である。専一者たちに保護を与え、無畏を与える者である。祭式の分け前をとる者であり、三グナを超えた者である。彼こそがそなたらに避難所を与える者であれ⁸²。(韻律: Mātrāsamaka 不規則⁸³)
- (15) (彼は)四(ヴェーダ)と五(祭式)を保持し⁸⁴、慈善行為と祭式における果報の取り分をとる者である。(彼は)征服されることのない力の強い者であり、常に善行の聖仙たちのアートマンに至る道を与えるのである(vidadhāti)⁸⁵。(韻律: Mātrāsamaka 不規則⁸⁶)
- (16) そなたたち苦行者は、専一の心をもって、世界の観察者、不生のプルシャ、太陽の色をした、自在の道である彼に何度も敬礼せよ。水より生じた者(ブラフマー神)でさえ、その聖仙(ナーラーヤナ)に敬礼したのである⁸⁷。(韻律: mātrāsamaka 不規則⁸⁸)
- (17) なぜならば彼こそが、世界の母胎であり、微細にして、太古からの、そして、不動にして最高の、

⁸²この詩節は、P と B.,K. で大きく読みが異なっている。韻律の問題もあるので、以下にそれぞれの読みを掲げておくことにする。

tapasām nidhiḥ sumatām mahato yaśasaś ca bhājanam ariṣṭakahā / (P.ab)
ekāntinām śarado 'bhayado gatido 'stu vaḥ sa makhabhāgaharas triḡuṇātigaḥ / (P.cd)

asuravadhakarāś tapasām nidhiḥ sumahatām yaśasām ca bhājanam / (B.,K.:ab)
ekāntinām śaraṇado 'bhayado gatido gatido 'stu vaḥ sukhabhāgakarāḥ / (K.cd) (B. にはこの 1 行はない。)
madhukaiṭabhahā kṛtadharmavidām gatido 'bhayado makhabhāgaharo 'stu śaraṇam sa te / (B.cd; K.ef)

Cf. Critical Notes: Very probably *ekāntināmis* marginalia for *vaḥ* and should not be regarded as part of the line, p.2230(right), v.14.

⁸³P. a,b,d 句: 16 mātrā, c 句: 23(16+7) mātrā. B. a,b 句: 15 mātrā, c,d 句: 20 mātrā. K. a,b 句: 15 mātrā (=B. a,b 句), c 句: 20 mātrā, d 句: 15 mātrā, e,f 句: 20 mātrā (=B. c,d 句).

Hopkins は、B. の ab 句を 16+14 mātrā, cd 句を 16 × 2 mātrā と数えている。(Hopkins[Great Epic], p.353.12-14) 前注の Critical Notes の指摘を考慮し、P.c 句冒頭の *ekāntinām* を除けば、c 句は 16mātrā となる。一方、K. の c 句末尾の *gatido* は、d 句冒頭にも繰り返されている。これを重複誤写と見て、c 句から除くと、K. の c 句は、*ekāntinām* を残したままで、16 mātrā となる。

⁸⁴*caturpañcadharāḥ* Cn. (reading *caturātmadharāḥ*) gloss: *catvāro, vāsudevasm̐karṣṇapradyumnaniruddhākhyāḥ ātmānaḥ, tān dhārayati / (caturātmadharāḥ* とは、*catvāraḥ* 四種の、すなわち、ヴァースデーヴァ・サンカルシャナ・ブラドユムナ・アニルツダと呼ばれる四者の、*ātmānaḥ* 本性たち、それらを保持している、という意味である) Csp.: (reading *caturātmadharāḥ*) gloss: *caturṇām cittabuddhimano'hamkārāṇām sarvātmakatve dhārakaḥ / (caturātmadharāḥ* とは、*caturṇām* 四種の、すなわち、心・統覚・思考器官・自我意識の、*sarvātmakatve* すべてを本性とする性質において、*dhārakaḥ* 保持している、という意味である) Cs. (reading *caturpañcadharāḥ*) gloss: *caturo vedān pañca yajñāṃś ca dhārayati / (caturpañcadharāḥ* とは、*caturāḥ* 四種の、ヴェーダと、*pañca* 五種の、祭式を、保持している、という意味である)

⁸⁵この詩節は、P と B.,K. で大きく読みが異なっている。韻律の問題もあるので、以下にそれぞれの読みを掲げておくことにする。

catuṣpañcadharāḥ pūrteṣṭayoś ca phalabhāgaharāḥ / (P.ab)
vidadhāti nityam ajito 'tibalo gatim ātmagām sukṛtinām ṛṣiṇām / (P.cd)

triḡuṇo viḡuṇaś caturātmadharāḥ pūrteṣṭayoś ca phalabhāgaharāḥ / (B.,K.:ab)
vidadhātu nityam ajito 'ticalo gatim ātmagām (K. *gatir ātmavatām*) sukṛtinām ṛṣiṇām / (B.,K.:cd)

⁸⁶P. a,b 句: 13 mātrā, c,d 句: 16 mātrā. B. a,b,c 句: 16 mātrā, d 句: 17 mātrā. (Cf. Hopkins[Great Epic]: mātrāsamaka, p.353.15) K. a,b,c 句: 16 mātrā (=B. a,b,c 句), d 句: 18 mātrā.

⁸⁷*salilodbhavo 'pi tam ṛṣiṃ praṇataḥ* Cn. *salilam udbhavo yasya sa nārāyaṇaḥ śeṣaśāyī / tam ṛṣiṃ, vāsudevam / (その者の udbhavaḥ 誕生が、salilam 水である者とは、シエーシャを寝台とするナーラーヤナである。tam ṛṣiṃ とは、ヴァースデーヴァに、という意味である) Cp. salilodbhavo brahmā / (salilodbhavaḥ とは、ブラフマー神は、という意味である) Ganguli: In these verses, it is to Vasudeva that the speaker is referring, p.180, fn.1.*

⁸⁸この詩節は、P と B.,K. で読みが異なり、韻律の問題もあるので、以下にそれぞれの読みを掲げておく。

tam lokasākṣiṇam ajam puruṣam ravivarṇam īśvaragatiṃ bahuśaḥ / (P.ab)
praṇamadhvam ekamatayo yatayaḥ salilodbhavo 'pi tam ṛṣiṃ praṇataḥ / (P.cd)

tam lokasākṣiṇam ajam puruṣam purāṇam ravivarṇam īśvaraṃ gatim bahuśaḥ / (B.,K.:ab)
praṇamadhvam ekamanaso (K. *ekamatayo*) yataḥ salilodbhavo 'pi tam ṛṣiṃ praṇataḥ / (B.,K.:cd)

P. は、すべての句が 16 mātrā であるが、b,c,d 句の九番目の音節が、単音になるべきところを長音(2 mātrā) になっている。B.,K.: a 句: 16 あるいは 21 mātrā, b 句: 17 あるいは 22 mātrā, c 句: 15 mātrā, d 句: 16 mātrā. Hopkins は B.(K.) の a 句あるいは b 句にある *purāṇam* の削除を示唆している。そうすれば、P. と同じ読みになり、a,b 句とも 16 mātrā になる。(Hopkins[Great Epic], p.353.17-24)

不死の場所である⁸⁹。それはサーンキヤとヨーガに従う、知 (buddhi) によって自らを制御した人々によって、高く支持され、常に (satatam) 認識されているのである⁹⁰。(韻律: Mātrāsamaka 不規則⁹¹)

[335 章] (B.347 章, C.13449-13546, K.357 章) (ナーラーヤナ章 (15) 馬頭の神)

ジャナメージャヤは言った⁹²。

- (1) (私たちは) この至尊の最高のアートマンの偉大さを、そしてダルマの家におけるナラとナーラーヤナの誕生を、そして大きな猪によって創造された太古のピンダの発生を聞きました。
- (2) そして、活動と無活動が、どのように定められたかについて、あるがままにあなたが語るのを私たちは聞きました、パラモンよ、汚れなき方よ。
- (3) かつてあなたは偉大な馬頭について語りました。神への供物と祖霊への供物を享受し、北東の大海に住むヴィシュヌ神の⁹³ 馬頭を、至尊のブラフマー神、すなわちパラメーシュティンは見ました⁹⁴。
- (4) 大威光の者たちにはかつてなかったその姿は、世界を維持するハリによって太古に創造されたのですか、思慮ある者たちの中で優れた方よ。
- (5) 神々の最上者を、すなわち、かつてなかった、無限の威力をもつ清浄な馬頭を見て、ブラフマー神は何をしたのですか、聖者よ。
- (6) パラモンよ、これが太古の知識の中に生じた私たちの疑問であります。最高の知性をもつ方よ、偉大なプルシャによって創造されたものを⁹⁵ お話し下さい。パラモンよ、私たちはかつて、清浄な物語を語るあなたによって清められたのです⁹⁶。

ヴァイシャンパーヤナは言った⁹⁷。

- (7) ヴェーダに匹敵する古譚をすべてそなたに語るであろう。それは聖なるヴィヤーサがダルマの息子である王に⁹⁸ 詠ったものである。

⁸⁹P. amṛtasya padam sūkṣmaṃ purāṇam acalam paramam B.,K.: amṛtasya padam sūkṣmaṃ parāṇam acalam hi padam

⁹⁰P. tat sāmkyayogibhir udāradhṛtaṃ buddhyā yatātmabhir viditaṃ satatam B.,K.: tat sāmkyayogibhir udāravṛtaṃ (K. udāhṛtaṃ) buddhyā yatātmabhir idaṃ sanātanam Cn. he udāra / dhṛtaṃ iti pāthāntare dhyātam / (別の読みでは、『おおウダラよ、(その誓いは) 保持された』と考えられた) Cp. udāratayā, mahattayā dhṛtaṃ, citte niveṣitam / (udāratayā とは、大きなものとして、dhṛtaṃ とは、心に置かれている、という意味である。) Cf.Hopkins[Great Epic]: Sāmkyayogins, models even in teaching of other tendency, p.99.24)

⁹¹P. a,b,c 句: 16 mātṛā, d 句: 18 mātṛā; B. a 句: 16 mātṛā, b 句: 17 mātṛā, c 句: 16 mātṛā, d 句: 18 mātṛā. K. a 句: 16 mātṛā, b 句: 17 mātṛā, c 句: 17 mātṛā, d 句: 18 mātṛā. Cf.Hopkins[Great Epic]: mātṛāsamaka, p.353.25-26.

⁹²P. janamejaya uvāca B.,K.: śaunaka uvāca

⁹³P. havyakavyabhujō viṣṇor B.,K.: havyakavyabhujō viṣṇor Cn. havyakavyabhujāḥ, mūlavibhujādītīvāt kaḥ (vār. to Pāṇini 3.2.5) / akārāntaḥ śabdaḥ / (havyakavyabhujāḥ(の-bhujā) は、御者などの (-bhujā で終わる語の) 性質をもつので, kṛt 接尾辞 ka が用いられている。(-bhuj ではなくて-bhujā というように)a の音を終りにもつ語である)

⁹⁴P.3ab=B.4ab, K.4ab; P.3cd=B.3cd, K.3cd すなわち, P. と B.,K. は行の順序が逆になっている。

⁹⁵P.,B.: mahāpuruṣanirmitam K. mahāpuruṣasamśritam

⁹⁶Ganguli: This speech is really that of Saunaka. Some incorrect texts represents it as the speech of Janamejaya. The following speech is that of Sauti, though the texts alluded above make it that of Vaisampayana, p.181, fn.1.

⁹⁷P. vaiśampāyana uvāca B.,K.: sautir uvāca

⁹⁸P. rājño dharmasutasya vai B.,K.: rājño pārīkṣitasya vai 王として, P. はユディシュティラを想定し, B.,K. はパルクシット王の息子ジャナメージャヤを想定している。

(8) ハリメーダス神の馬頭の姿について聞き、疑問の生じた王は、彼(ヴィヤーサ)を招いた。

ユディシュティラは言った⁹⁹。

(9) ブラフマー神は馬頭をもつ神を見たということですが、神によって作られたその美しい姿は¹⁰⁰何のために現れたのですか。

ヴィヤーサは言った¹⁰¹。

(10) この世界では身体と結びついているものはすべて、人々の王よ、自在神の意識より生じた¹⁰²五つの元素に浸透されているのである。

(11) 自在神は、世界の創造者であり、支配者であり、力あるナーラーヤナである。ナーラーヤナは、生き物の内的アートマンであり、恩寵を与える者であり、グナをもつ者であると同時にグナなき者である¹⁰³。生き物の滅(した状態)である未顕現について¹⁰⁴聞くがよい、最高の王よ。

(12) まず初めに、地が水たちに、すなわち一つの海に帰滅する。そして、水が火の元素に帰滅し、火は風に帰滅する。

(13) 風は虚空に帰滅し、虚空はマナスに帰入する¹⁰⁵。マナスが顕現(vyakta)に帰滅すると、顕現は未顕現の状態(avyaktatā)に至る。

(14) 未顕現がプルシャに至り¹⁰⁶、プルシャもまた遍在者に至ると¹⁰⁷、暗闇のみが存在し¹⁰⁸、一切は認識されなくなった。

(15) 暗闇からブラフマンが¹⁰⁹生じた。それは暗闇の根源であり、天則を本性としている¹¹⁰。それは

⁹⁹P. yudhiṣṭhira uvāca B.,K.: janamejaya uvāca

¹⁰⁰P.,K.: vapur devopakalpitaḥ B. tan mamācākṣva sattama

¹⁰¹P. vyāsa uvāca B.,K.: vaiśampāyana uvāca

¹⁰²P.,K.: īśvarabuddhibhīḥ B. īśvarabuddhibhīḥ N. īśvarabuddhibhir īśvarasaṃkalpamātraiḥ / (īśvarabuddhibhīḥとは、自在神の願望のみによって、という意味である)

¹⁰³saguṇo nirguṇo 'pi ca Ca. saguṇo 'smādātibhīḥ saṃkarṣaṇāntaḥ / nirguṇo nityamukto bhagavadvāsudevāvākhyāḥ / (我々に始まり、サンカルシャナまでは、saguṇaḥ グナをもつ者であり、永遠に解脱した聖なるヴァースデーヴァと呼ばれる者が、nirguṇaḥ グナなき者である) Cs. jīvarūpeṇa saguṇaḥ paramātmārūpeṇa nirguṇaḥ / (個我の姿としては、saguṇaḥ グナをもつ者であり、最高のアートマンの姿としては、nirguṇaḥ グナなき者である)

¹⁰⁴P.,K.: bhūtapralayam avyaktaṃ B. bhūtapralayam atyantam

¹⁰⁵cākāśasaṃlīne ākāśe ca manonuge Sandhi irregular: ākāśasaṃlīne ākāśe Cf. Oberlies[Grammar]: 1.1.4. Absense of *udgrāhasandhi*, 1.1.4.1. -e ā-, p.16.14.

¹⁰⁶avyakte puruṣaṃ yāte Cp. puruṣaṃ yāte, pumpraktīvibhāgajopādhibhedābhāvād ity arthaḥ / (puruṣaṃ yāte とは、プルシャと根本原質の相違より生じた標識の相違がなくなるために、という意味である)

¹⁰⁷pumṣi sarvagate 'pi ca N. puṃsi sarvagate brahmaṇi līne sati pralayāvasthāyāṃ tama evābhavat / (puṃsi プルシャが、sarvagate, すなわち、ブラフマンに、帰滅した時には、帰滅の状態の中で、tama evābhavat 暗闇のみが存在した、という意味である)

¹⁰⁸tama evābhavat Ca. tama evābhavat, tama ivābhavat, prakāśyaparakāśayor asmadādigocarayor aprakāśāt / (tama evābhavat とは、暗闇のごとくなった、という意味である。照明の対象と照明の両者が、すなわち、我々などを領域とする両者が、照明をもたないためである) Cn. viśeṣavijñānaṃ sarvaṃ luptam ity arthaḥ / ((tama evābhavat とは) 特殊な認識であり、一切が欠けている、という意味である)

¹⁰⁹brahma Cn. brahma, jagatkāraṇaṃ paramavyomākhyam / (brahma とは、世界の原因であり、最高天と言われる)

¹¹⁰P.,K.: tamomūlam ṛtāmakam B. tamomūlāmṛtāmakam Ca. mūlaṃ, saṃhārasya kāraṇam / (mūlam とは、帰滅の原因である) Cn. tamomūlāmṛtaṃ svādhyastatamasā upetaṃ sat / (tamomūlāmṛtam とは、自らに置かれた暗闇を伴って存在している、という意味である) Cs. tamomūlam, ajñānaṃ mūlaṃ yasya / (tamomūlam とは、その根源が無知である者、という意味である) Cv. tamomūlam, tamaḥpadoditatriguṇamūlam / ṛtāmakam, ṛtam yathārthavijñānaṃ, tadātmakam / (tamomūlam とは、暗闇という実体から生じた三種のグナの根源ということである。ṛtāmakam とは、ṛtam 天則を、すなわち、あるがままの対象の認識、tadātmakam それを本性とする、という意味である)

すべての存在の名称を終りにもち¹¹¹、プルシャの¹¹²姿をとるのである。

- (16) それはアニルツダと言われる。それは第一原因と表現される¹¹³。それは三種のグナをもつ未顕現であると知られるべきである、最高の王よ。
- (17) 学問を友としてもつ¹¹⁴ ヴィシュヴァクセーナ神、すなわち力あるハりは¹¹⁵、睡眠のヨーガに入り¹¹⁶、多くの性質からなる多様な世界創造を考えつつ¹¹⁷、水中に臥床を作った。
- (18) 彼が創造を考えていると、自分の性質として「大」が想起された¹¹⁸。それから自我意識が生じた¹¹⁹。それは美しい四つの顔をもつブラフマー神であり、全世界の祖父、至尊のヒラニヤガルバである。
- (19) 蓮の花のごとき眼をした輝ける永遠の者(ブラフマー神)は、アニルツダから現れて¹²⁰、千の葉の蓮に座った。
- (20) サットヴァに住する¹²¹かの力強きパラメーシュティン(ブラフマー神)は、不思議な光の中に、水たちからなるもろもろの世界を見た。それから、もろもろの生き物の群を創造したのである。
- (21) しかしすでに(pūrvam eva)、太陽の光のごとき輝きをもつ蓮の葉には、ナーラーヤナによって作られ、すぐれた性質をもつ二つの水滴があった。
- (22) 無始無終にして、動揺なき至尊者(ブラフマー神)はその二つを見た。そのうちの一つの水滴は、蜜のごとく(madhu-ābho)光り輝いていた。
- (23) その時、それはナーラーヤナの命令によって、タマス性の(アスラである)マドゥ(Madhu)として誕生した。もう一方の水滴は堅く(kāṭhina)、ラジャス性の(アスラである)カイタバ(Kaiṭabha)(として誕生した)。

¹¹¹viśvabhāvasamjñāntaṃ Cs. viśvasyāhaṃkāre bhāvaḥ utpattiḥ yasmāt tad viśvabhāvam / (あるものから、自己宣言において?)、viśvasya 一切の、bhāvaḥ、すなわち、発生があるもの、それが viśvabhāvam である)

¹¹²pauruṣīm Cn. pauruṣīm, vairājīm / (pauruṣīm とは、ヴィラージの子の、という意味である) Cs. hiranyagarbhōpādhitvena sthitam / ((pauruṣīm とは) ヒラニヤガルバの代理として存在する者の、という意味である)

¹¹³tat pradhānaṃ pracakṣate Cv. pradhānaṃ, prakṛtiniyāmakam / (pradhānam とは、根本原質を限定するものである)

¹¹⁴vidyāsahāyavān Cv. vidyāsahāyavān, vidyaiva sahāyo yasya sa tathoktaḥ / avidyopādānakatvaṃ jagato nirākartum idam uktam / (vidyāsahāyavān とは、ある者の友が学問のみである時、その者が、そのように言われている。世界が無知を材料としていることを排除するために、このことが言われているのである)

¹¹⁵この後、すなわち、この詩節の ab 句の後に、K. は次の 1 行を挿入している。(=MBh.XII.895*)

ādikartā sa bhūtānām aprameyo hariḥ prabhuḥ /

(生き物たちの最初の創造者にして、量り難くして力強きハりは、)

¹¹⁶nidrāyogam upāgataḥ Cf. Hopkins[1901]: sleep-yoga, p.360.25.

¹¹⁷cintayan Cn. cintayan, bahu syām prajāyeya (Taitt.Up.2.6) iti iṅṣaṇaṃ kurvan / (cintayan とは、「私は、多となるであろう。私に子をませよ」と観察しつつ、という意味である)

¹¹⁸mahān ātmaguṇaḥ smṛtaḥ Cv. ātmaguṇaḥ, paramātmāno jñānādiguṇabharitaḥ / mahān, mahattattvābhīmānī brahmā / smṛtaḥ, putra iti smṛtaḥ / (ātmaguṇaḥ とは、最高のアートマンの知識などの性質に満ちている、という意味である。mahān とは、偉大な原理として自分を意識するブラフマー神は、という意味である。smṛtaḥ とは、「息子である」と想起された(?)、という意味である)

¹¹⁹ahaṃkāras tato jāto Ca. ahaṃkāraḥ, mahān ātmā saṃkarṣaṇākhyāḥ / (ahaṃkāraḥ とは、大きなアートマンであり、サンカルシヤナと呼ばれる者が、という意味である)

¹²⁰padme nīruddhāt saṃbhūtas Cn. padme, brahmāṇḍe, aniruddhāt ahaṃkārat, saṃbhūtaḥ āvirbhūto brahmā / (padme, すなわち、ブラフマンの卵の中に、aniruddhāt, すなわち、自我意識から、saṃbhūtaḥ, すなわち、現れた、ブラフマー神は、という意味である)

¹²¹sattvastaḥ Cp. sattvastaḥ, rajastamasor madhukaiṭabhayor hananayogyatām āha / (sattvastaḥ とは、ラジャスとタマスの、すなわち、マドゥとカイタバの、殺害可能性について言ったのである)

- (24) タマスとラジャスのグナをもつすぐれた両者は、力強く、棍棒を手にして、蓮の茎に沿って突進した。
- (25) 両者は、無量の輝きをもつブラフマー神が、蓮に座って、まず最初に美しい姿の四つのヴェーダを創造しているのを見た。
- (26) それから、化身した最上のアスラの両者は、もろもろのヴェーダを見て、ブラフマー神が見ているのに、いきなりそれらのヴェーダを掴んだ。
- (27) そして、すぐれたダーナヴァたる両者は、これら永遠のヴェーダを掴んで、すぐに北東の大海の中の地下界に入った。
- (28) これらのヴェーダが奪われたので、ブラフマー神は絶望した。そしてもろもろのヴェーダを奪われた彼は、支配神に(次のように)語った¹²²。
- (29) 『これらのヴェーダは私の最高の眼です。これらのヴェーダは私の最高の力です。これらのヴェーダは私の最高の家です。これらのヴェーダは私の最高のブラフマンです。』
- (30) 私のヴェーダはすべて、二人のダーナヴァによって、ここから力づくで奪われました。もろもろのヴェーダを奪われた私の世界は、暗闇となりました。もろもろの世界の創造を始めようとしても¹²³、これらのヴェーダなしに何ができましょうか。
- (31) ああ、ヴェーダ喪失より生じた私の苦しみの大きなことよ。それは、(私を)深い憂いへと引き渡しつつ¹²⁴、(苦しみが)到達した心を悲しませるのです。
- (32) 憂いの海に沈んだ私を、今日ここで引き上げてくれるのは誰でしょうか。失われたもろもろのヴェーダを取り戻してくれるのは(誰でしょうか)。誰が私に好意をもってくれるのでしょうか。』
- (33) このように話しているブラフマー神に、すぐれた王よ、ハリを讃えようとする意識 (buddhi) が生じたのである、英知ある者たちの最上者よ (buddhimatām vara)。それから力強き神 (ブラフマー神) は合掌した手を高く掲げて¹²⁵(次のような) 最高の祈りを唱えた¹²⁶。
- (34) 『ブラフマンの心臓よ、あなたに敬礼します¹²⁷。私の年長者よ、あなたに敬礼します。世界の始まりよ、世界の最高者よ、サーンキヤとヨーガの蔵よ¹²⁸、遍在者よ、

¹²²B.,K. は次に brahmovāca を挿入している。

¹²³P. lokān vai sraṣṭum udyataḥ B.,K.: lokānām sṛṣṭim uttamām

¹²⁴P. tīvraśokāya randhayan B.,K.: tīvraṃ śokaparāyaṇam Cf.Critical Notes: tīvraśokāya randhayan, boring a hole in the sensitive part of the body, causing excruciating pain, p.2231,(left), v.31. B.,K.: tīvraṃ śokaparāyaṇam Cf.Critical Notes:

¹²⁵sāñjalipragrahaḥ Cs. sāñjalipragrahaḥ, uddhṛtakarasamputaḥ / (sāñjalipragrahaḥとは、手の鉢形を持ち上げて、という意味である)

¹²⁶B.,K. はこの詩節の後に、brahmovāca omを挿入している。

¹²⁷P. namas te brahmahṛdaya B.,K.: om namas te brahmahṛdaya Cf.Hopkins[Great Epic]: Hypermetric Śloka, aum as prefixed extra metrum, p.257.18.

¹²⁸sām̐khyayoganidhe Cs. sām̐khyayoganidhe, ātmānātmaprakāśaka / (sām̐khyayoganidheとは、アートマンとアートマンに非ざる者を照らす者よ、という意味である)

- (35) 顕現と未顕現の創造者よ、思考を超えた方よ、平安の道に立つ方よ¹²⁹、一切の享受者よ、あらゆる生き物の内的アートマンよ、胎生にあらざる方よ、
- (36) 私は、あなたの恩寵より生まれました、世界の家よ、自存者よ¹³⁰。あなたからの私の最初の誕生は、あなたの心より生じ (mānasam)、再生族によって敬われました。
- (37) 私の第二の誕生はあなたの眼からであり、太古にありました。そして、あなたの恩寵によって、(あなたの) 偉大な言葉から (vācikaṃ) 私の第三の誕生がありました。
- (38) 私の第四の誕生もまたあなたの耳からでありました、遍在者よ。さらに (あなたの) 鼻からの¹³¹ 私の誕生は、あなたからの第五の誕生とされています。
- (39) 卵より生まれた私のも¹³² あなたによって第六 (の誕生) として創造されました (vinirmitam)。そして蓮より生まれたこの第七の誕生もまた (あなたによって創造されました)、無限の力をもつ方よ。
- (40) それぞれの創造において、私はあなたの息子であります、三グナを離れた方よ¹³³。蓮華の眼をもつ方よ、(私は) 最もすぐれたグナによって (身体を) 作られた者として (pradhānaguṇakalpitaḥ) 知られています¹³⁴。
- (41) あなたは、自在を本性とする自存者であり、最高のプルシャであります¹³⁵。私は、ヴェーダを眼としてもち、年齢を越えた者として¹³⁶、あなたによって創造されました。
- (42) 私のこれらヴェーダが奪われ、私の眼は暗闇となりました。お目覚めください。私に両眼をお与え下さい。私はあなたにとって愛しい者であり、あなたは私にとって愛しい方です。』
- (43) このように称賛されて、かのあらゆる方向に顔を向けた至尊のプルシャは、眠りを捨てた。そしてその時、ヴェーダのために為すべきことをしようと決心して、ヨーガの自在力によって¹³⁷ 第二の姿をとった。
- (44) その時、力強い神は、美しい鼻をもつ身体となって、月のごとく輝き、美しい馬の頭をもるもるのヴェーダの住居とした。

¹²⁹P.,B.: panthānam āsthita K. panthānam āsthitaḥ

¹³⁰P. lokadhāmne svayaṃbhuve B.,K.: lokadhāma svayaṃbhavaḥ

¹³¹P. nāsikyam B.,K.: nāsatyam

¹³²aṇḍajaṃ cāpi me janma Cn. aṇḍam, brahmāṇḍam taddarśanasamaṣkārajaṃ vāsanātmakaṃ svāpnaprapañcamayam / tato `pi bāhyaṃ śaṣṭham / (aṇḍam 卵とは、ブラフマンの卵である。それを見た影響によって生じた、潜在力を本性とし、夢における顕現からなるものである。それ故、(第五の誕生と) 異なる第六である)

¹³³P. triṅṇavarjitaḥ B.,K.: triṅṇavarjita B.,K. の呼格の読みに従う。

¹³⁴P. prathitaḥ B.,K.: prathamah

¹³⁵P. tvam īśvarasvabhāvaś ca svayaṃbhūḥ puruṣottamaḥ B. tvam īśvaraḥ svabhāvaś ca karmabandhaḥ svayaṃbhavaḥ K. tvam īśvarasvabhāvaś ca bhūtānām tvam prabhāvāna

¹³⁶P.,B.: vedacakṣur vayotigaḥ K. vedacakṣur vayotiga Cn. yato vedacakṣur aham ato vayotigaḥ, kālavit / (私は vedacakṣuḥ ヴェーダを眼とする故に、vayotigaḥ、すなわち、時を知る者である) Esnoul: en vérité, extrêmement vieux, avec les Veda pour regard, p.191, v.45)

¹³⁷P. aiśvareṇa prayogeṇa B.,K.: aiśvareṇa prayogeṇa Cs. aiśvareṇa prayogeṇa, yogaiśvareṇa / (aiśvareṇa prayogeṇa とは、ヨーガの自在力によって、という意味である) Cf.Hopkins[1901]: the equivalent of *yoga aiśvarya* of Gītā xi. 8, is found in the words *aiśvareṇa prayogeṇa dvitīyaṃ tanuṃ āsthitaḥ*, p.360.22.

- (45) 星座と星を伴う天空が彼の頭であった。そして彼の髪は長く、太陽の光に匹敵する輝きをもっていた。
- (46) 虚空と地下界が二つの耳であり、生き物を保持する地が額であった¹³⁸。清浄なガンガー川とサラスヴァティー川という大河が¹³⁹ 二つの眉であった。
- (47) 月と太陽が両目であり、薄明 (samdhyā) がその鼻であると伝えられる。聖音オームが装身具であり、雷が舌として作られた。
- (48) ソーマを飲む者として知られた祖先たちがもろもろの齒である。牛の世界とブラフマンの世界が、偉大なアートマンの二つの唇であった¹⁴⁰。グナを超えた世界破滅時の夜 (kālarātrir guṇottarā) が、王よ、彼の頸となった。
- (49) このように、さまざまな姿を具えた馬頭を創造した後、一切を支配する力強い神は姿を消し、地下界に入った。
- (50) 彼は、再び地下界に入って、最高のヨーガを行った。音声学にかなった (śaikṣam) 発声を行って、「オーム」と音を発した。
- (51) この柔和な音は、反響しつつ、一切に至り、地中に入り、あらゆる生き物に徳性が生じた¹⁴¹。
- (52) すると、(マドゥとカイトバの) 二人のアスラは、これらのヴェーダを一まとめにして¹⁴²、地下界に投げ置いて、声のする方へ急いだ。
- (53) この間に、馬頭をもつハリ神は、王よ、地下界にあった¹⁴³ これらのヴェーダをすべて取り、そして再びブラフマー神に与えた。そして自分の本来の姿 (prakṛti) に戻ったのである、
- (54) 馬頭を北東の大海に置かした後で。それ以来、馬頭は、もろもろのヴェーダの住居となった。
- (55) 一方、何も見つけなかったマドゥとカイトバの二人のダーナヴァは、再び急いで戻ってきた。そして二人はこれらのヴェーダを投げ置いた所には何も無いのを見た。
- (56) それから、力ある者たちの中ですぐれた両者は、最高の勢いをもって、再び素早く地下界の住居から¹⁴⁴ 上昇した。そして最初の創造者である力強い彼のブルシャを見つけた。
- (57) 彼は、白い色をして、月のように清浄な光を発し、アニルツダの姿をしていた。さらに彼は、無限の勇気をち、睡眠のヨーガに入っていた¹⁴⁵。

¹³⁸lalāṭam bhūtadhāriṇī Cv. lalāṭam bhūtadhāriṇī, bhūtānām piśācādīnām ādhārahūtām antarikṣam / (lalāṭam 額とは bhūtadhāriṇī, すなわち, bhūtānām, すなわち, ピシャーチャなどの, 容器であるもの, すなわち, 中空である)

¹³⁹P. gaṅgā sarasvatī puṇyā bhruvāv āstām mahānadī / B. gaṅgāsarasvatī śroṇyau bhruvāv āstām mahodadhī K. gaṅgāsarasvatī puṇye bhruvāv āstām mahādyutī /

¹⁴⁰ca oṣṭhāv āstām mahātmanaḥ Sandhi irregular: ca oṣṭhāv Oberlies[Grammar] の分類に従えば, 1.1.2. Absence of *praśliṣṭa-sandhi*, -a/ā o- のケースになるかと思われるが, 同書にはこの項目はない。p.13.10-11 参照。

¹⁴¹P.,K.: sarvabhūtaguṇoditāḥ B. sarvabhūtaguṇo hitāḥ

¹⁴²kṛtvā vedān samayabandhanān Ganguli: The two Asuras, making an appointment with the Vedas in respect of the time when they would come back to take them up again, p.184.14. Deussen: Darauf nehmen die beiden Dämonen den Veden das Versprechen ab [ihnen gehorsam zu sein], p.837, v.56. Esnoul[1979]: Alors les deux Asura lièrent ensemble les Veda, p.192, v.56.

¹⁴³rasātālagatān Cf. 水野 [2014]: *rasātala*, p.42.8.

¹⁴⁴rasānām ālayāt tadā Ca. rasānām ālayaḥ, samudraḥ / (rasānām ālayaḥ とは, 海である) Deussen は *rasā-nāma-āśrayāt* と一つの合成語と捉えて, 'aus der Rasā (Unterwelt) genantten Behausung' と訳している。(p.838, v.62) Ganguli: rose from the nether region, p.184.29. Esnoul: remontant de la strate des enfers, p.193, v.62.

¹⁴⁵nidrāyogam upāgatam Cf.MBh.XII.335.17; Hopkins[1901]: sleep *yoga*, p.360.24.

- (58) 彼は、彼自身大きさに応じて作られ、水上に置かれ¹⁴⁶、蛇のトグロでできた、そして炎の輪で囲まれた寝台で(睡眠のヨーガを行っていた)。
- (59) 汚れなき善性 (sattva) をそなえ、美しく輝く彼を見て、二人の力強いダーナヴァは大笑いをした。
- (60) ラジャスとタマスをそなえた両者は言った。「ここに白い人が寝入って横になっている。
- (61) まさにこの者によって、地下界からもろもろのヴェーダは奪われたのだ。彼は誰のものか。一体何者なのか。なぜ蛇のトグロの上で寝ているのか¹⁴⁷。」
- (62) 両者は、このように言葉を発して、ハリを目覚めさせた。目覚めた最高のプルシャは、両者が戦いを望んでいるのを知って、
- (63) その二人の力あるアスラを観察した後、戦いを決意した。そこで、両者とナーラーヤナとの戦いが起こった。
- (64) ラジャスとタマスに満ちた体をもつマドゥとカイトバの両者を、マドゥスーダナ(マドゥの殺害者ハリ)は、ブラフマー神を利するために (brahmaṇopacitiṃ kurvan) 殺した。
- (65) 両者の速やかな殺害とヴェーダの奪還によって、最高のプルシャはブラフマー神の憂いを除いた。
- (66) それから、敵が殺され、ヴェーダによって守られたブラフマー神は、(ハリによって) 守護され、動くもの・動かぬものからなるあらゆる世界を創造した。
- (67) ハリは、父祖(ブラフマー神)に世界創造に関する最高の知識を¹⁴⁸ 与えて、もと来たところに姿を消した¹⁴⁹。
- (68) ハリは、馬頭の姿をして、この二人のダーナヴァの勇者を殺した後、再び、行為のダルマのために¹⁵⁰、その同じ姿をとった。
- (69) このように、この大きな幸運をもつハリは馬頭となった。それは、恩寵を与える自在神の太古の姿であると言われている。
- (70) バラモンが常にこのことを聞かならば、あるいは、心に保つならば、その者のヴェーダ読誦は、決して滅することはないであろう。

¹⁴⁶ātmapramāṇaracite apām upari kalpīte Sandhi irregular: *ātmapramāṇaracite apām* Cf. Oberlies[Grammar]: 1.1.5. Absence of *abhinīhita-sandhi*, 1.1.5.1. -e a-, p.20.2.

¹⁴⁷kiṃ ca svapīti bhogavān Cs. bhogavān, nāgabhogasāyanaḥ / (bhogavān とは、蛇のとぐろを寝台として、という意味である)

¹⁴⁸p. buddhiṃ B., K.: matim

¹⁴⁹tatraivāntardadhe devo yata evāgato hariḥ Ca. māyāyā evāgato māyāyām evāntardadhe / māyā cāśya vidheyā, na tv asmadādinām iva mohinīti bhāvāḥ / yato 'sau vastugatyā vyāpārahitas tato na kuto 'py āyāto nāpi yātaḥ / (幻影によって āgataḥ 来たものが、幻影の中に antardadhe 消えた。彼の幻は発揮されるべきものであって、我々などのように惑わせるものではない、という意味である。それは実体の状態としては動きのないものであるから、どこから来るといってもなく、どこに行くということもないのである)

¹⁵⁰pravṛttidharmārtham Ca. pravṛttidharmārtham, svargādikāmānām tallābhaphalārtham / anyathā saṃsārasargasyāsambhava eva / (pravṛttidharmārtham とは、天界などもろもろの願望の、その獲得という果報のために、という意味である。そうでなければ、輪廻世界の創造は生じないであろう)

- (71) パンチャーラ仙は、恐ろしい苦行によって馬頭をもつ神を礼拝して、ラーマの¹⁵¹ 示した道において、ヴェーダ吟唱法 (krama) に到達したのである。
- (72) 王よ、馬頭とはこのようである。そなたが私に尋ねた、ヴェーダに一致する太古の物語が、そなたに語られたのである。
- (73) 神は、行為規範に従って、何らかの姿を作りたいと望む時には、自分で自分を変異させつつ¹⁵²、その姿を自ら作り出すであろう。
- (74) 彼は吉祥なヴェーダの器である。彼は苦行の器である。彼はヨーガでありサーンキヤであり、原初のブラフマン (brahma cāgryam) であり、遍在するハリである¹⁵³。
- (75) もろもろのヴェーダはナーラーヤナを頂点とし、もろもろの祭式はナーラーヤナを本質とする。苦行はナーラーヤナを頂点とし、道はナーラーヤナを頂点とする。
- (76) 真実はナーラーヤナを頂点とし、天則はナーラーヤナを本質とする¹⁵⁴。再生を困難にするダルマはナーラーヤナを頂点とする¹⁵⁵。
- (77) 行為を特徴とするダルマもまた、ナーラーヤナを本性とする。地における最も優れた (性質である) 香りは、ナーラーヤナを本性とすると伝えられている。
- (78) 水たちの性質である味は、王よ、ナーラーヤナを本性とする¹⁵⁶。火たちの性質である色も¹⁵⁷ ナーラーヤナを本性とすると伝えられている。
- (79) 風の性質である触感もナーラーヤナを本性とすると伝えられている。虚空に生じる音声もナーラーヤナを本性としている。
- (80) 目に見えないという性質 (avyaktaḡuṇa) を特徴とする心 (manas) もそれ (ナーラーヤナ) から生じた。時 (kāla) も、ナーラーヤナを頂点としている。そして、星たちの進行も彼 (ナーラーヤナ) である。
- (81) 名誉、幸運、吉祥の女神たちは、ナーラーヤナを頂点としている。サーンキヤはナーラーヤナを頂点とし、ヨーガはナーラーヤナを本性としている。

¹⁵¹P.,K.: rāmena B. devena

¹⁵²vikurvāṇadh Cv. vikurvāṇaḡ, vividhaṡ kāryaṡ kurvāṇaḡ / (vikurvāṇaḡとは、さまざまな行為をなしつつ、という意味である)

¹⁵³P. harir vibhuḡ B.,K.: havir vibhuḡ

¹⁵⁴nārāyaṇaparaṡ satyaṡ ṛtaṡ nārāyaṇātmakam / Ca. satyaṡ vācā satyavacanam, ṛtaṡ vastugatyā yat satyaṡ iti bhedaḡ / (satyaṡは、言葉による真実の言明, ṛta は、事物の状態として真実、という相違がある) Cp. ṛtaṡ ca sūnṛtā vāṇī satyaṡ ca samadarśanam iti bhedaḡ / (ṛtaṡとは、心地よき言葉であり, satyaṡとは、平等の見である、という相違がある)

¹⁵⁵nārāyaṇaparo dharmāḡ punarāvṛttidurlabhaḡ Cs. punarāvṛttidurlabhaḡ, nivṛttidharmakāraṇam / (punarāvṛttidurlabhaḡとは、無活動のダルマの原因である、という意味である)

Cf. Matsubara[1994]: Nārāyaṇa connected with *dharma*, p.130.5.

¹⁵⁶P. apāṡ caiva guṇo rājan rāso nārāyaṇātmakāḡ B.,K.: apāṡ cāpi guṇā rājan rasā nārāyaṇātmakāḡ

¹⁵⁷P. jyotiṡāṡ ca guṇo rūpaṡ B.,K.: jyotiṡāṡ ca paraṡ rūpaṡ

- (82) プルシャを原因とする人々もいれば、第一原因 (pradhāna) を原因とする人々もいる。またある人々にとっては、自性が、もろもろの祭式が、運命が原因とされる¹⁵⁸。
- (83) あらゆるものに関わる¹⁵⁹ もろもろの理由によって (hetubhiḥ) 真理を知らんと欲する人々にとって、ハリは、(前述した) 五種の原因 (kāraṇa) として数えられることから、あらゆるところでの基盤 (niṣṭhā) である。
- (84) ブラフマー神と共にある諸世界の人々にとって¹⁶⁰、そして偉大な聖仙たちにとって、唯一の偉大なヨーギンである力強きハリ・ナーラーヤナが真理である。
- (85) サーンキヤに従う人々の、ヨーギンたちの、苦行者たちの、そしてアートマンを知る者たちの、望むところをケーシャヴァは知っている。しかし彼らはケーシャヴァの望むところを知らないのである。
- (86) あらゆる世界において、神の供養と祖先の供養を行う人々、もろもろの布施を与える人々、大苦行を行う人々、
- (87) これらすべての人々にとって、権威ある規範に立つヴィシュヌは拠り所である。彼は、あらゆる生き物のために作られた住居 (āvāsa) であるので、ヴァースデーヴァ (vāsudeva) と言われるのである¹⁶¹。(Cf.MBh.XII.328.36)
- (88) この神は、永遠であり最高である。この神は、偉大な聖仙であり、大きな威光をもち、グナをもちながら、グナなき者と言われている¹⁶²。この神は、すぐにもろもろのグナと結合する。あたかも時 (kāla) が、季節に応じて季節と結びつくかのように。(韻律: Upajāti¹⁶³)
- (89) 誰も、この偉大な存在がどこへ行くのかを知らず、どこから来るのかを見ない。知を本性とし、自己を統御する偉大な聖仙たち (のみ) が¹⁶⁴、グナより高き (guṇādhikam) 永遠のプルシャを見るのである。(韻律: Indravamśā¹⁶⁵)

¹⁵⁸svabhāvaś caiva karmāṇi daivaṃ yeśāṃ ca kāraṇam Cs. svasmin sarvaṃ bhāvayati svabhāvaḥ kālaḥ, sa yeśāṃ jyotirvidāṃ mate kāraṇam / mīmāṃsakānāṃ mate karmāṇi kāraṇam / (自分の中で一切を生じるというのが svabhāvaḥ、すなわち、時である。時は天文学者たちの考えでは、kāraṇam 原因である。ミーマーンサー学派の人々の考えでは、karmāṇi もろもろの祭式が、kāraṇam 原因である)

B.,K. はこの詩節の後に次の 2 行を挿入して、五種の原因に言及している。(=MBh.XII.898*) P. では次の第 83 詩節に「五種の原因」が言及されている。 adhiṣṭhanaṃ tathā kartā karaṇaṃ pṛthagvidham /

vividhā ca tathā ceṣṭā daivaṃ caivātra pañcamam /

((神は) 拠り所であり、行為者であり、種々の作具であり、そして種々の行為であり、そしてここで五番目として、運命である。)

¹⁵⁹sarvatomukhaiḥ Cs. sarvatomukhaiḥ sarvānukūlaiḥ / (sarvatomukhaiḥ とは、あらゆるものに適合する、という意味である)

¹⁶⁰P. sabrahmakānāṃ lokānām B.,K.: brahmādināṃ salokānām

¹⁶¹sarvabhūtakṛtvāso vāsudeveti cocyate Cf.Matsubara[1994]: immanence, the outstanding characteristic of Vāsudeva, against Viṣṇu, the original priority of transcendence and omnipresence, p.94.6.

¹⁶²P. guṇavān niraṅgākhyāḥ B. guṇavarjitākhyāḥ K. guṇavān guṇākhyāḥ

¹⁶³ただし b 句のみ 12 音節からなっている点が不規則である。

¹⁶⁴P.,K.: saṃyamino maharṣayaḥ B. santi hi ye maharṣayaḥ

¹⁶⁵ただし、b 句のみ第 1 音節が短音で Vamśasthavila となっている点、b 句と d 句の最終音節は短音となっている点が不規則である。